



TITLE:

(随想)真夏の夢

AUTHOR(S):

平松, 信夫

CITATION:

平松, 信夫. (随想)真夏の夢. 泌尿器科紀要 1961, 7(10): 881-882

ISSUE DATE:

1961-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112208>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 7 卷 第 10 号

昭和 36 年 10 月

随 想

真 夏 の 夢

大阪警察病院 平 松 信 夫

今年の夏も暑い。蒸暑い夜が続くと医書など読む根気もなく却て戦争中暢気に暮した南の島がなつかしい。沛然と降るスコールの後の爽快さ、密林の闇に何千と云う蜚の群が呼吸を合せて光を点滅する涼しい夏の夜は毛布なしでは寝られない。然し考へて見れば惨めなニューギニアの生活ではあつた。

最初渡つたのは南洋委任統治領のパラオ島、仏桑葉の紅い花がパイア、バナナの青い葉並の間に映えてエメラルド色の海に浮んだ珊瑚礁の島でとても明るい。南方行きの部隊と内地送還の患者で賑い、丁度地獄、極楽行きの交叉点の様な島だ。昭和19年1月愈々ニューギニアへ出発、上陸したのは西部ニューギニアのマノクワリと云う港だ。黒々とした原始林が海に迫つていて僅に砂浜の海岸があり粗末な栈橋が一本突き出ているだけだ。心細くて俊寛にでもなつた様な感じがした。住民は黒いパプアの土人ばかりで、後から見れば男女の区別がつかず、子供は全裸、大人は宣撫用に貰つた布を僅に腰に巻いているだけだが、幸い人肉は最近食わないと聞いて安心した。背中や胸に文身をしているとの事で近付いてよく観ると立派な渦状癬である。高橋吉定教授等だつたら喜んだ事だろう。兵隊の病気は熱帯マラリアと栄養失調ばかりで、月に2回はマラリアの発作が来る。私の部隊は工兵隊で余りお上品ではなく、中支や比島から三等症を持つて来た者も随分居た様だが、強烈なマラリア療法で淋菌もスピロヘータも死滅して全快したらしい。敵は近くのピアク島に上陸して来て毎日空襲や艦砲射撃を受けたが、それよりも苦しんだのは食糧難である。蜥蜴や蛇は御馳走だ。蝸牛やどかり、密林の中の柔かそうな木の葉や根つ子を食いつないで毎日薯作りだ。甘薯の根が太く甘くなる迄待てずに食うから筋ばかり、薯の葉のすましはあくが強くて真黒い汁である。蛋白質やビタミン、食塩等の不足から兵隊は水死体の様に腫れ上り、それが間もなく萎んで来たなと思うと次の朝は死んでいると云う状態で、薬剤も沸底し脚気患者には米糠の一匙が貴重なビタミン剤、下痢には椰子の実の殻を焼いて作つた炭の粉を飲ませる位である。女の話をする元気な奴は居ない。食物の話ばかりだ。米は望み得ないがせめて薯を腹一杯食い度いと云つて死んだ兵隊の手帳に遺書の様に「駿河屋の羊羹、高砂の金つば、風呂上りの紀州蜜柑」と書いてあつたのが今も尚ほ忘れられない。斯うした最低の生活を続けていると浅間しい人間性が露骨となり、肩章の星の数や口鬚の立派さも最早その値打がなくなる反面、しみじみとした友情の有難さに泣くこともある。私の部隊は独工15聯隊と云う歴戦部隊で、一部はガダルカナル島で大半の兵を喪い、主力は東部ニューギニアのスタンレー山脈を越えてポートモレスビーの街の灯が見える処迄進撃しながら戦況不利の為退却し、隊長以下多くが戦死したが、パラオで再編成し再度ニューギニアに追いやられた貧乏部隊だつたが、お蔭

で蕃地での自活の要領がよく、非力の軍医も死なずに済んだと云う訳である。

今年も何度目の終戦記念日が来た。最近ソ聯へ墓参の事が報ぜられているが、ニューギニアで死んだ兵隊には殆んど墓もない。みんな丈なす夏草となつている事だろう。儚ない当時の想出の中で特に私にとって印象の深い三人の友人が居た。永山、加藤、李の三君だ。

私の部隊が軍の転進道路構築のため山中暮しをしていた頃、通りかかつて一晩泊めてやつたのが永山見習士官である。慈恵医大で生化学を専攻していたと云う彼は静かな密林の夜更け、その学位論文の業績や今後の研究の構想を細々と認めてある手帳を見せて楽しそうに語っていた。彼は兵站病院付きの軍医だつたが、その後イレウスを起し開腹手術の結果遂に粗末なジャングル内の病牀で亡くなつた。彼は同大学の永山教授の令息だつた事を死後聞いたが何とも御同情に堪えない。当時は生きる事の難きに比して死の安らかさを思う時も多かつたが、彼の様な有意な青年学者の死だけは特に痛恨に感じた。

永山君の病院へよく遊びに行つていた頃、衛生下士官の加藤君と知合つた。目のぎろりと大きく、話の面白い江戸っ子である。芝居のうまいのが全軍に知れ、遂に軍司令官の命令で演芸分隊を編成することとなつた。私の部隊の大工、左官が司令部に近い森の中へ芝居小屋の建築を引受けた。座長の彼は前進座に居たとかで芸名市川莚司と云い沢村国太郎の実弟とか、綺麗な奥様の写真を大事に持つていてよく見せられた。自家発電で豆電球が点り白木の舞台も出来上り此処にマノクワリ劇場の開演となつた。入場料は薯一つかみ。各部隊月一回割当ての観劇が待遠しかつた。浅草の灯や臉の母、国定忠次など久振りに日本の家や景色を舞台の上に見せられた夜は皆眠れなかつた。彼は最近文芸春秋に「南の島に雪が降る」の一文を書き、又テレビでそれを放送し、関の弥太っぺの舞台で綿や紙の雪を降らせて雪国出身の部隊の将兵を泣かせた感激を伝へている。希望のない戦地で唯一の慰安を与えてくれた功労者である。戦後食糧事情の悪い頃、私は郷里和歌山の田舎で夏祭の夜、はからずも少い座員を連れて巡業に来た加藤君に逢つて互に健在を喜んだが、その後彼は加東大介なる芸名で映画に進出、「大番」の牛ちゃんを立派にやつてのけ、爾来映画俳優として活躍していることは愉快なことである。

李鐘賛少佐は私の部隊の副隊長格、当時28才位だつたか陸士出の実に俊敏にして情厚き美男子である。殺風景な現地では話の合う連中が少く、どうしても私なんかと語る機会も多く、葉隠武士や万葉集を論じ時には彼が生れた韓国の旧家の生活や食物、そして彼が意中の人の事などしんみり語ると云う純情さを持つていた。敗戦となつた後は吾々は一途に帰還の事だけを考えていたが、彼の悩みはもつと深く、所詮一生を変転極りなき韓民族のために波瀾に富んだ運命を辿らねばならぬと決心していた様だ。既に日本人ではなくなつた彼との別れは再会も期し難く感慨無量であつた。その後風の便りに彼は韓国軍の参謀長とかになつて当時李承晩氏が軍を以て議会制圧の具にせんとした時、断乎之に抵抗し遂に米国へ追いやられたとか、今も尚お彼が信念の強い正義の士であることを痛快に思つたが、幸福な結婚をしたのだろうか、色々と苦勞の多い事だろうと遙かに健在を祈つていた。此度のクーデターによつて誕生した新内閣や国家再建最高会議のメンバーにも彼の名はなく、想像の域を絶した彼の国の政情のもと彼の安否を気遣つていたがその後の新聞紙上でベルギー大使李鐘賛中將の名を見出し一応安堵している次第である。

寝苦しい夏の夜が続くと不思議に苦しかつた事は忘れて、なつかしい南の島の空を想う、海を想う。特に毛色のかわつた三人の戦友の面影は年と共に尚お新たである。

南の島の真夏の夜の夢だ。蓋し悪夢ではある。